

山梨県水産技術センター便り

本栖湖でレイクトラウト駆除釣り大会が開催されました

研究管理幹 青柳敏裕

近年、本栖湖ではヒメマス不漁が続いていますが、令和4年に確認されたレイクトラウトによる食害が原因と疑われています。その後の当所調査では、本栖湖には既に相当数のレイクトラウトが生息しているものと推定されました。現在、当所では本栖湖で捕獲したレイクトラウトに超音波発信器を装着して行動追跡調査を行っていますが、この調査の実施中は試験魚の混獲を避けるため、刺網による駆除が困難です。そのため、行動追跡調査期間中の駆除については、遊漁者が釣り上げたレイクトラウトを漁協が買い取る方法が中心となります。

しかし、釣りによる駆除はマンパワーに頼る部分が多く少しでも効率を上げるため、地元の富士河口湖町・身延町・本栖湖漁協により、ヒメマス釣りの復活と存続を目的に、レイクトラウト釣り大会が開催されました。

令和7年10月5日、事前公募の釣り人178名が参加し、昼までに合計19尾のレイクトラウトが釣りあげられました。大会では同時に、地元特産であるヒメマスやあけぼの大豆、今回駆除の対象となったレイクトラウトを使った食のイベントも開催されました。

駆除を目的とした釣り大会は、実施主体や費用の面で実現が難しいと思いますが、本イベントでは、地元の町が観光資源と位置づけるヒメマスの不漁に危機感を持ち、クラウドファンディングにより資金が捻出されました。地元の町が中心となり、ヒメマス釣りの存続を図る呼びかけに多くの方がご賛同くださったことは心強い限りと考えています。



令和7年度増殖技術講習会を開催しました

主任研究員 三浦 正之

令和7年7月10日に増殖技術講習会を水産会館において開催しました。本年度は環境省鳥獣保護プランナーの加藤ななえ先生をお招きし、「カワウの生態と生息環境」と題してご講演いただきました。カワウの生態を知ることなくして、適切な被害防除対策を行うことはできないことから、全国有数のカワウの専門家である加藤先生にカワウの生態について、詳細にかつわかりやすく解説していただき、参加者にとって非常に有用な機会となりました。

以下に講演の概要を紹介いたします。

講演の内容

被害防除において、知っておくべきカワウの重要な特徴は、群れをつくる、魚食性、高い移動能力、季節を問わず繁殖可能なことである。また、ねぐら（夜間の集団休息場所）やコロニー（繁殖地）の位置と規模を把握することが個体群管理のために行うモニタリングの基本である。ねぐらやコロニーは河川や湖沼、公園などに形成されるが、人の立ち入りが少ない水辺が好まれる。

カワウは海水域から淡水域までを広く利用し、このことが世界中に分布する要因のひとつと考えられる。魚の分布に応じて採食場所を季節移動し、効率的に餌を得る。1日に食べる量は野生下で体重の約1/4（約500g）と考えられている。カワウの食性は幅広く、嗜好性は低く、取りやすい魚を選ぶ傾向がある。遊泳速度は、アユよりも速く、10m以上潜水可能である。羽毛が水に濡れやすく浮力が少ないため潜水効率は高いが、体温が奪われやすくエネルギー源として多くの餌が必要となる。日々の行動範囲は半径15km程度であることが多いが、複数の都道府県を跨ぐ広域的な季節移動も行う。

全国の主要なカワウ営巣地の繁殖時期を見ると、日本ではどの時期もどこかで繁殖が行われている。

カワウは食料事情に応じて繁殖時期を柔軟に調整できることから、コロニーの攪乱は繁殖期間の長期化や分布拡大につながるおそれがある。

個体数の増加だけでなく、ねぐら、コロニーの分布拡大が漁業被害に直結しており、これらの分布管理が重要である。個体群管理、被害対策、生息地環境管理がカワウ管理の三本柱である。山梨県では、ねぐらやコロニーの場所、個体数、被害の状況が適切に把握されており、全国で最もカワウの管理に成功している都道府県と言える。今後もぜひこのようなカワウ管理体制を継続していただきたい。



現場視察・指導の様子

講演の翌日には、カワウのコロニーを一元管理している山梨県中央市の河川敷にある「高部コロニー」において、アーボリスト（樹護士）との協働による流動パラフィンを用いた繁殖抑制作業をご視察いただく中で、加藤先生からさまざまなご助言をいただきました。



第48回全国養鱒技術協議会大会が開催されました

支所長 名倉 盾

今年度から山梨県が運営委員長を務めている養鱒技術協議会は、7月2～3日、静岡県焼津市において「第48回全国養鱒技術協議会大会」を開催し、140名を超える多くの関係者にご参加いただきました。

今回の大会では、昨年末のパイセス終売の通知を受け、中心課題を「これからの水カビ病対策」とし、日本獣医生命科学大学の倉田修教授から「魚卵水カビ病の基礎知識と予防策について」、北海道大学の笠井久会教授からは「消毒剤によるサケ属魚卵のミズカビ病防除法の開発」と題して、水カビ病の基礎知識や新たな水カビ病防除法についてご講演をいただきました。

倉田先生のご講演では、魚卵で繁殖するカビの種類や生活環、水カビ病の発生機序など本疾病の基礎知識やパイセスに代わる対策事例が示されました。原因菌種の多くは卵菌類（水カビ）であり、特定の菌種ではないこと、死卵が遊走子の標的となり被害を広げるため、卵質が良く、死卵が生じない場合には問題とならないことなど、改めて水カビ病そのものに対する理解を深めることができました。

笠井先生からは、現在開発中の消毒剤が水カビ防除剤として有望であり、近々ニジマスとアユ卵について最適条件が決定される見込みであること、今後の実用化に向けて安全性や残留性について検討していくことなど、代替薬の開発に関する現状と今後の展望についての講演がなされました。

以上のご講演のほか、当協議会の魚病対策研究部会からは、水カビ病対策の現状についての報告がありました。現状、パイセスを使用している種苗生産機関が多数あり、パイセス終売により生産に支障をきたすことが示されたほか、直ちに代替策となりうるものとして、銅ファイバー、黄銅ファイバー、塩水浴による手法が提案されました。

さらに、中心課題に関連する研究発表・話題提供と

して、青森県から発表のあった「次亜塩素酸ナトリウムを用いたニジマス卵の水カビ対策」、静岡県の「孵化筒を用いたマス類卵管理の一例」についても、今後の代替策の選択肢として有望であることが示されました。

これらを踏まえた総合討議では、開発中の代替薬の実用化にはまだ時間の掛かることが予想されるため、当面の間、薬剤を用いない既存の代替策でしのぐこととし、状況に応じた対策を各県の試験場が指導すること、また、魚病対策研究部会において黄銅ファイバーを用いた連絡試験を実施することなどが確認されました。

養殖業者の皆様におかれましては卵の水カビ病対策に不安があれば忍野支所までご相談ください。忍野支所では銅ファイバーを使用した水カビ防除を行っていますが、使用水の水質によっては銅の溶出量が過大になる場合があります、本格運用前に試用することが望ましいです。そのため、なるべく早めのご相談をお願いします。

以上、本年度の大会における中心課題に関連する発表を紹介させていただきましたが、山梨県では養殖技術部会において温暖化に伴う暑熱対策について検討を進めているところであり、課題の一つとして取り組んでいきます。

令和8年は山梨県が担当して東京都で大会を行います。有意義な会議にいたしますので、山梨県の養鱒関係者はぜひご出席をお願いします。



山日 YBS 農業賞受賞おめでとうございます

11月21日、第57回山日 YBS 農業賞が発表され、忍沢養殖場（代表取締役秋山富一氏）が最高賞である農業賞を受賞しました。

本表彰は、意欲的に先進的な農水産業を実践している団体、個人に対して贈られる賞です。忍沢養殖場は富士川町の戸川上流で、「海のない山梨でも美味しい魚を」という理念のもと、早くから食用魚を主体とした養殖に取り組み、本県初となるブランドサーモンである「甲斐あかね鱒」や県のブランド魚の富士の介、イワナやアマゴを養殖、加工して峡南地域などの旅館や飲食店に供給しています。加工では6次産業化の認定を受け、「スモモーク」など20種類を超える加工品の開発を行い、地元の特産品として定着しています。

また、アユと並び富士川の名物であったサツキマス復活を目指す地元市町村の事業に積極的に協力し、放流種苗の供給のほか、地元の小中学校に対して発眼卵を配布、ふ化した稚魚を地元の川に生徒が放流する体験学習にも継続的に取り組んでいるなど、地域振興への貢献が高く評価され、今回の受賞の運びとなりました。



令和7年12月23日発行

本 所

〒400-0121 甲斐市牛匂 497
TEL 055-277-4758 FAX 055-277-3049
E-mail: suisan-gjt@pref.yamanashi.lg.jp

支 所

〒401-0511 南都留郡忍野村忍草 3098-1
TEL 0555-84-2029 FAX 0555-84-3707
E-mail: suisan-osn@pref.yamanashi.lg.jp